

〔講演要旨〕 山奈宗真史料にみる岩手県沿岸の歴史津波

蝦名 裕一* (東北大学災害科学国際研究所)・今井健太郎 (海洋研究開発機構)・首藤伸夫 (東北大学名誉教授)

§ 1. はじめに

明治二十九年(1896)に発生した明治三陸地震津波の被災地を踏査した山奈宗真は、明治三十六年(1903)に『岩手県沿岸大海嘯取調書』など7点の史料を帝国図書館に寄贈した。山奈が帝国図書館に寄贈した史料のうち、歴史津波に関する言及があるのが、37町村の被害実態を記した『三陸大海嘯岩手県沿岸見聞誌一斑』、37町村190部落における調査・聞き取りを記した『岩手県沿岸大海嘯取調書』、部落ごとの絵図を集成した『岩手県沿岸大海嘯各村別見取絵図』、および踏査中に聞いた津波由来地名について記した『岩手県沿岸古地名考』である。これらに記される歴史津波に関する情報を山奈がどのように収集したかという点について、遠野市博物館所蔵『岩手県海岸巡回古文書拾集録』を中心に明らかにしていくことにする。

§ 2. 山奈宗真の踏査行程と古文書筆写

『岩手県海岸巡回古文書拾遺録』は洋野ノート98枚であり、前半部に山奈が書写した古文書の写し、後半部が「海嘯被害地巡回日誌」で構成され、部分的に踏査の際のメモ書きが記されている。

『岩手県海岸巡回古文書拾集録』には、山奈が各地で書写した古文書が鉛筆書きで記されている。収録されている古文書群のうち、出所が判明するものを大別すると、表1のとおりとなる。古文書筆写における山奈の姿勢は、調査対象を地震・津波のみに限定せず、当該地域の気候や凶作、馬産をはじめとする各地の産業や旧藩時代の税制、あわせて幕末に岩手県沿岸部で発生した三閉伊一揆に関する情報を筆写している。

特に注目されるのは、山田関六古文書抜書の中で、慶長十六年(1611)に発生した慶長奥州地震津波について、次のように記している点である。

一、十月廿八日大槌八日町市立四ツ頃之時大津波小槌明神ノ下タマテ水先上ル大槌川通ハ金

沢ノ下モマテ水先上ル

慶長奥州地震津波の発生時刻については、仙台藩の『政宗君記録引証記』に引用される『真山記』には「巳刻過(午前10時)大地震津浪入」、『宮古由来記』に「昼八ツ時(午後2時)に大津波にて」という記述があることから、従来から地震と津波の発生にタイムラグがあることが指摘されている。しかし、ここでは地震とほぼ同時刻に津波が発生したと記されており、慶長奥州地震津波の発生時刻については再検討をする材料となる。

§ 3. 山奈宗真の伝承調査について

『岩手県沿岸古地名考』に記載される津波由来地名について、例えば気仙郡広田村(現陸前高田市)に存在したとされる「駒込」という地名については、同地点で明治三陸津波の際にも「蒲生辰之助」なる人物が馬を助けたとの逸話が記されている。「日誌」によれば、広田村では「蒲生氏案内ニテ宇大陽ヨリ大野巡巡回」とあり、「駒込」の地名由来については、この時に山奈が蒲生氏より聴取したことが判明する。

ただし、津波由来地名については信憑性に乏しいものも多く、例えば津波で舟が流れ着いたとして気仙郡日頃市字舟野(現大船渡市)を記載しているが、舟野地区は標高100メートル以上の地点にあり、これは「舟」の語句に関連して明治三陸津波後に発生したフォークロアを記載したものとみられる。

§ 4 おわりに

山奈の調査は、当時の岩手県沿岸に存在した古文書や伝承を率直に記録した所にその意義がある。すなわち、山奈宗真史料における歴史津波の記述は、①古文書調査に基づく情報と②地域住民から聴取した伝承に基づく情報、という異なる情報源から採集されている。ゆえに、山奈史料の歴史津波の記述をデータとして用いる場合には、それぞれの情報源を特定して検証した上で、活用する必要があるだろう。

対象地域	表題	主な内容
山田町周辺	山田関六家古書写	慶長津波のこと、オランダ船漂着のこと
	山田関六古文書抜書	地震・津波、異常気象、海難事故、課税、三閉伊一揆
宮古町周辺	船越作兵衛所蔵	証書類
	島山長之助所蔵書ヨリ写拔下記	「宮古由来記」と同内容
織笠村周辺	(無題)	火事・海難に関する事項。ほか『閉伊百姓記』など。
野田村・久慈町周辺	久慈町浅沼郡長ノ古文書写	運上金、漁業関係書類
	北九戸郡役所書類抜書	明治25年に帝国理科大学が実施した口碑伝承調査
小本村周辺	小本村岸利蔵氏所蔵	慶長津波に関する記述、『宮古由来記』と同内容
宇部村周辺	宇部才吉所蔵	三崎野の馬、惣高のこと
九戸郡周辺	南九戸郡役所二而写	九戸郡の馬産、旧八戸藩時代の租税
気仙郡周辺	(無題)	旧仙台藩政時代の農政、証文のこと

表1:『岩手県海岸巡回古文書拾遺録』に収録される古文書群とおもな内容